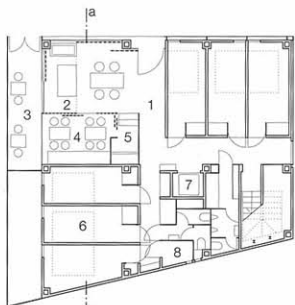


東京の低予算ホテル

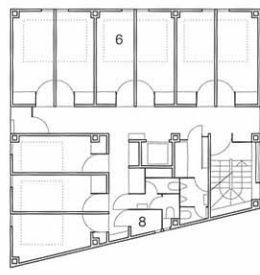
入江正之

Budget Hotel in Tokyo, Japan

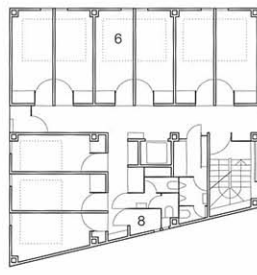
Architect:
Masayuki Irie, Tokyo
Assistants:
Jun Ikemura, Takayo Irie



1階



2階



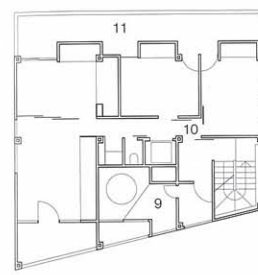
3階



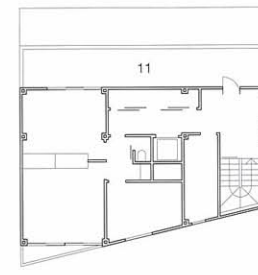
敷地図
S=1:2000
平面図・断面図
S=1:250

- 1 玄関
- 2 キッチン
- 3 廊
- 4 朝食用食堂エリア
- 5 フロント
- 6 客室および布団の敷かれた状態
- 7 荷物用リフト
- 8 シャワー
- 9 ジャグジー
- 10 オーナー住居
- 11 オーナー住居のバルコニー

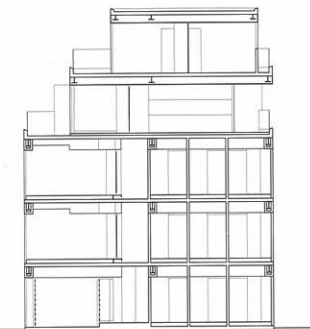
客室数 24
客室規模 7-8m²
料金 約53ユーロ
敷地面積 148.58m²
延床面積 520.79m²
建設費 105万ユーロ



4階



5階



aa

1,200万人の人口を抱える大都市東京のホテルの宿泊費は、世界でも最高位に数えられる。この行燈旅館のような手ごろな料金でありながら質の高い宿泊施設はまれである。この小さな個人営業ホテルは、若い旅行者向けとはいえず、典型的なバックパッカー専用宿というわけではない。その説得力あふれるミニマリズム建築のスタイルと、現代的水準を満たすモダンな設備によって、このホテルは広く、世界中から訪れる旅行者の注目を集める存在である。日本の伝統的な宿泊施設である「旅館」の現代的な再解釈の試みであるこの行燈旅館においては、この種の建築タイプの特徴が新たなフォルムへと翻訳し直されている。ホテルは三ノ輪の近くの閑静な住宅街にあり、銀座のショッピングエリアからは地下鉄で20数分の距離にある。狭い敷地に立つこの5層構成の建物では、1cmにいたるまで無駄なく空間が活用されている。この旅館では3つのフロアに24の客室が収められている。各室はわずか7m²の広さしかない。洗濯、シャワー、トイレ用のそれぞれのスペースは、各フロアの共同利用施設として建物中央のコアの部分にひとつまとめられている。階段やその他のアクセスエリアは最小限の広さが確保され、エレベーターの代わりに荷物用の小さなリフトのみが装備されている。施工方式と使用された建築材料はモダンであるとともに、費用効率もよい。鉄骨構造は、半透明および透明ガラス、金属板、木製ラチスグリルからなるファサードの内部に収納されている。廊下の天井は圧延金属メッシュパネルで覆われている。ホテルの大きさは最小限の規模だが、設備は高水準である。全室にDVDプレー

ヤーが完備され、廊下には無料のインターネットブースが設けられている。4階には宿泊客用のジャグジーが用意されている。この階とその上の階は旅館のオーナーの住居である。伝統的な日本家屋の例にならって、この旅館においても畳の寸法(およそ90×180cm)が客室の大きさを決める単位となっている。小さな造付けの戸棚を除けば、ほかに一切家具はない。夜になれば、布団を出して延べるだけのことである。空間が節約されているにもかかわらず、天井まである窓と白塗りの内装のおかげで、部屋は明るく風通しがよい。フロントと朝食用の食堂とキッチン—これらもまたコンパクトなつくりだが、充実している—は、連続するオープンスペースとして設計されている。このスペースは圧延金属製の引戸で仕切ることが可能で、この引戸は伝統的な紙障りの引戸式壁要素である「障子」を連想させることを狙っている。電話ボックスよりもかろうじて大きい程度のフロントのカウンターは、夜になるとまるで食器棚の台のように上に持ち上げられて閉じられてしまう。光にあふれた客室などの通常のスペースとは対照的に、廊下のスペースは全体に黒の内装を背景に明るく輝き、廊下内に神秘的な佇まいを醸し出す。旅館の名前もまたさまざまな連想を呼び覚ます。「行燈」とは、その昔、旅人の足元を照らすランプを指す言葉であったからである。

